

動詞の意味だけでは説明できない英語の結果構文

On the Resultative Constructions in English Which Cannot Be Explained by the Meaning of the Verb Itself

森藤 庄平*
Shohei Morito

Abstract:

This paper discusses the so-called ‘fake/derived resultative construction’ in English, which is of great interest to linguists for the following reasons: (a) the meaning of the verb and of the underlined resultative phrase are independent of each other; (b) the postverbal NP behaves syntactically like a direct object, although it is not licensed by the verb; and (c) the construction functions as a strategy by which, for almost any activity, a corresponding accomplishment can be formed (Jackendoff’s ‘aspectual coercion’). Number of investigations have been made based on these properties.

Several problems with the projectionist approach on a basis of the fundamental assumption that the lexical entry of a verb determines the morphosyntactic expression or projection of its arguments will be pointed out. Rather, I will propose that the meaning of resultative constructions can be derived from the meaning of the construction itself, and that the ‘Direct Object Restriction’ should be described not in the syntactic structure but the conceptual/semantic structure. I will propose a revised version of the ‘Direct Object Restriction’ as a semantic restriction, and with this, attempt to explain all examples which the projectionists have failed to explain. This restriction can also be applied to the ‘true resultative construction’.

1. はじめに

1・1 結果構文の特性と分類

英語には、一つの文の中で、主動詞が表す行為の結果として何らかの状態変化が生じていることを表す結果構文 (resultative constructions) と呼ばれている構文がある。この構文をめぐってこれまで多くの考察がなされてきた (Simpson 1983; Carrier and Randall 1992; Goldberg 1995; Levin and Rappaport Hovav 1995; Wechsler 1997; 影山 2001; 高見・久野 2002; Goldberg and Jackendoff 2004; Thompson 2006 など)。これらの研究から、(1)のように、結果構文は分類できる。

(A)の区別は、動詞が他動詞か自動詞かで結果構文を分類している。(B)の区別は、Washio (1997) によるもので、結果構文に生起している動詞の固有の意味性質によって結果述語が決まるものを弱い結果構文と呼び、決まらないものを強い結果構文と呼ぶ。(C)は目的語から見た分類であるが、(1e)では結果構文として現れる自動詞は、非能格

(1) 結果構文の分類

(A)	(B)		(C)
他動詞	弱い	a. He painted the house blue.	本来の目的語
	強い	b. He wiped the dirt off.	擬似目的語
自動詞	弱い	c. The river froze solid. (状態変化)	目的語なし
		d. John danced into the room. (位置変化)	
	強い	e. He laughed himself hoarse.	擬似目的語
		f. He laughed the singer off the stage.	

動詞でもあるにもかかわらず、「見せかけの再帰代名詞」(himself)、(1f)では「下位範疇化されていないNP」(the singer) という「擬似目的語」が結果述語とともに生じている。また、これと同様に強い他動詞結果構文においても、(1b)のように、結果述語を伴うと「下位範疇化されていないNP」(the dirt)、つまり「擬似目的語」が生じることによって結果構文として成立しうる (Rappaport Hovav and

* 愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

Levin 1998)。 (1b)の擬似目的語に関して、影山 (1996) は(2)の容認性の違いから、*wipe* という動詞は、本来表面を布などでこするという動作を表すので、テーブルなどの物体を目的語として取り、ふき取る物質を目的語にすることはないことを指摘している。

- (2) a. He wiped the table.
(wipe the table = ACT ON the table)
b. *He wiped the dirt.

しかしながら、強い結果構文は、多くの先達によって、基本的な構文とみなされている(1a)(1c)(1d)と比べ、周辺の構文と考えられているが、(3)–(5)で見られるように、英語的な表現としてよく観察される。

- (3) a. Kay wiped the counter clean.
b. Sylvia shoveled the walk clear.
(Levin and Rappaport Hovav 1991: 144)
(4) a. Joggers often run themselves sick.
b. poor Sam ... had coughed himself into a haemorrhage ...
(Rappaport Hovav and Levin 2001: 780)
(5) a. The professor talked us into a stupor.
(Jackendoff 1990: 227)
b. The joggers ran the pavement thin.
(Levin and Rappaport Hovav 1995: 53)

結果構文が表す意味は、主動詞が表す行為の結果として何らかの状態変化が生じることを意味するのであるが、それは、結果述語 (resultative predicate) の付加により生じることが知られている。そこで、(6)のような下線部で表した結果述語が付加された他動詞の例を見てみよう。

- (6) a. The waiter wiped the table (*in/for two minutes).
b. The waiter wiped the table dry (in/*for two minutes).
(ibid.: 58)

wipe のような動詞は、本来非完了動詞であるが、(6b)のように、下線部の *dry* のような結果述語を付加すると、*for* 句で修飾できない。これは、この文が完了的事態を表していることを示している。このことは、時間限定を表す *in* 句、または継続を表す *for* 句が共起するか否かによって、(6a)は未完了 (atelic) の状態を表し、(6b)は完了 (telic) を意味していることで確かめられる。つまり、結果述語がつかない時は、非完了的事態を表すのに対して、結果述語が付加されると完了的事態に変換される。このような動詞

の語彙アスペクト (lexical aspect) の変換強制は「アスペクト変換」と呼ばれ、Jackendoff (1997a) は、強制 (coercion) の一つとしている。

このアスペクト意味転換は、劇的に、(7)や(8)のような強い自動詞結果構文に現れることを、三原 (2004) は指摘している。

- (7) a. The joggers laughed {*in/for} about two minutes.
b. The joggers laughed themselves into a frenzy {in/*for} about two minutes.

(三原 2004: 178)

- (8) a. The joggers ran {*in/for} an hour.
b. The joggers ran the Nikes threadbare {in/*for} an hour. (ibid.: 19)

このようなアスペクト変換を、(9)の動詞類型の観点からみると、活動動詞として解釈される動詞が、結果述語を伴った場合、達成動詞として解釈されると述べるができる。

(9) Vendler (1967) の 4 分類:

- (A) 状態 (states) : know, believe, have, desire, love
(B) 到達 (achievements) : recognize, spot, find, lose, reach, die
(C) 活動 (activities) : run, walk, swim, push a cart, drive a car
(D) 達成 (accomplishments) : paint a picture, make a chair, push a cart to the supermarket, recover from illness

以上、結果構文の分類と特質を見てきた。

1・2 本稿の対象と目的

本稿では、前節で述べた結果構文の特質をより深く探ることを目的とする。この構文が持つ特質の解明には、この構文に現れる動詞 (主動詞) の意味だけで扱えるのか否かを検討する必要がある。結果構文の分析として、Levin and Rappaport Hovav (1995) などが提唱する、動詞の意味だけで分析を試みる投射主義アプローチ (projection approach) があり、一方、Goldberg (1995)、影山 (2001)、Goldberg and Jackendoff (2004) などが提案する、それぞれの結果構文にはそこに生起する動詞の意味に帰することができない特有な意味があるとする構文主義アプローチ (constructional approach) がある。本稿では、投射主義アプローチの問題点を指摘した上で、構文主義アプローチの立場から結果構文を分析し、Goldberg and

Jackendoff (2004) に基づき、結果構文は構文事象 (constructional subevent) と動詞事象 (verbal subevent) との組み合わせであるとし、結果構文特有の意味は、構文事象が持つ構文的意味と動詞事象が持つ θ 格子の意味との組み合わせであることを示す。

2. 投射主義アプローチの問題点

2・1 投射主義アプローチの概観

大きな単位の意味はそれを構成する下位単位の意味の組み合わせから決まるとする意味の合成性 (compositionality) に基づき志向性を認める意味論から、文の基本構造を動詞の意味が決定するとする立場は、Culicover and Jackendoff (2005) が言う「主流の生成文法」(mainstream generative grammar) が取っている立場である。藤田・松本 (2005) は、この立場では、この理論全体の推移(「投射原理」と「 θ 基準」の破棄)に関わって、動詞を語彙部門で語彙挿入される語彙項目とする見方から、統語派生の中で形成されるとする見方に変わってきていると主張している。つまり、語彙特性から統語構造が投射されるとして、動詞を語彙的と見る考え方から、動詞を統語的と見て、統語構造から語彙特性の一部が生じるという考え方になってきているのである。意味の志向性に基づくアプローチでは、統語部門にのみ生成能力を認めて、音韻・概念部門を解釈的とする考えに基づいている。

本稿では、藤田・松本 (2005) に従い、前者を語彙主義アプローチと呼び、後者を反語彙主義アプローチと呼ぶが、両者とも意味の合成性に基づいている点ではともに投射主義であると見なす。本稿で問題とする結果構文で見られるアスペクト意味変換を、両者は語彙特性の一部としている点で投射主義者である。両者は、その意味を語彙的に読み取るか、統語的に読み取るかで異なる。この節では、語彙主義であろうと、非語彙主義であろうと、投射主義アプローチの立場での結果構文の分析には、経験的にも概念的にも問題があることを示す。以下、語彙主義アプローチと反語彙主義アプローチに分けてそれぞれの問題点を指摘する。

2・2 語彙主義アプローチ(語彙特性から統語構造が投射されるとする立場)とその問題点

Simpson (1983)、Carrier and Randall (1992)、Levin and Rappaport Hovav (1995) などは、語彙主義アプローチに基づき、動詞の語彙特性から投射 (project) された語彙概念構造 (lexical conceptual structure)、項構造 (argument structure)、D 構造 (D-structure) などで、結果構文の特性が記述できるとしている。特に、その観点から、結果構

文に課せられる制約として支持されてきたものは、Levin and Rappaport Hovav (1995) が提案した(10)の D 構造で適用される直接目的語の制約である。この節では、Levin and Rappaport Hovav (1995) を語彙主義アプローチの代表として取りあげ、その問題点を示す。

(10) 直接目的語の制約 (Direct Object Restriction) :

結果述語が叙述できる対象は、D 構造の直接目的語に限られる。

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 34ff.)

結果述語が叙述できる対象は D 構造の直接目的語のみであるという一般化は、(11)の他動詞文の主語(外項)、(12)の前置詞の目的語は叙述できないという事実から導かれる。

(11) *The boy broke the window to tears.

(高見・久野 2002: 359)

(12) *The silversmith pounded on the metal flat.

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 41)

受動文や非対格構文では、内項位置から名詞句の移動が生じていると仮定すると、その名詞句の痕跡と結果述語の間で直接目的語の制約が満たされることになる。

(13) He laughed *(himself) hoarse. (cf. (1e))

(14) a. The house_i was painted t_i blue. (cf. (1a))

b. The river_i froze t_i solid. (cf. (1c))

c. The pavement_i has been run t_i thin by all the

joggers. (cf. (1f)) (岸本 2005: 104)

そこで、結果構文において、非能格動詞が現れるためには、直接目的語の制約から、結果述語と叙述関係を結ぶ擬似目的語が必要となる。(15a)では主語との連関を仲介する「みせかけの再帰代名詞」(fake reflexive)が、(15b)では、動詞から意味選択されていない目的語 (unselected object) が、直接目的語位置に具現されなければならない。ここで重要なことは、投射主義者が、(15a)のようなみせかけの再帰代名詞を、意味が無いもの (meaningless) であって、統語的な制約である直接目的語の制約をみたすための統語的な存在物にすぎないと見なしている点である。

(15) a. He laughed *(himself) hoarse. (cf. (1e))

b. He laughed *(the singer) off the stage. (cf. (1f))

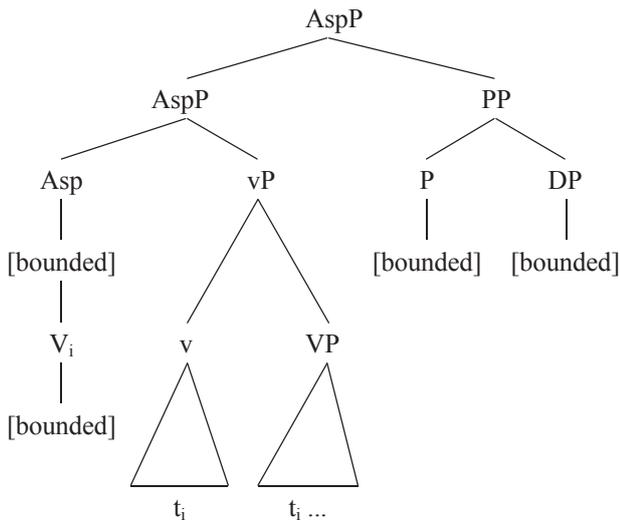
以上見てきたことから、この直接目的語制約には、自動

である。Thompson (2006) は、このアスペクト変換を、[bounded]という素性をもつ動詞が、(25a)のように、アスペクト限定詞として機能する[bounded]という素性をもつ目的語か、あるいは(25b)のように、[bounded]という同じ素性をもつ着点句 PP が、統語的に整合(素性照合)することによって、有界的事象を読みとれる統語構造が派生されると主張している。

- (25) a. [bounded] verb, [bounded] Aspect,
[bounded] direct object
b. [bounded] verb, [bounded] Aspect,
[bounded] PP (Thompson 2006: 215)

一つ例をあげれば、(26)のように、アスペクト構造を決定している機能範疇 Asp(ect)P の照合領域内で、[bounded]という素性が照合されるために派生された統語構造から、有界の意味を読み取ることになる。

(26)



(Thompson 2006: 217)

しかしながら、この分析を結果構文の分析に用いると、いくつかの点で問題となる。第一に、[bounded]という素性が、概念的にも経験的にも問題があるということである。(27)で、非対格動詞 *arrive* の(27a)は完了の読みを持つ文として適格であることから、[bounded]という素性をもつ PP (*into the store*) が生じ、*arrive* は、[bounded]という素性を持ち、照合されることになるが、(27b)の場合は、(27a)と同様に動詞 *arrive* と [bounded]という素性をもつ PP (*into the store*) が用いられているのに、なぜ非文法的なのかが説明できない。また、(27c)においても、(27a)と同じ動詞 *arrive* であるが、この文で完了的事象の読みは出てこない。そこで、*breathless* という AP が [bounded]

という素性を持つというだけでは、なぜこの有界的事象の読みでは不適格なのか、説明できない。

- (27) a. John arrived into the store.
b *John arrived himself into the store.
c *John arrived breathless. (Tortora 1998: 339)

また、(28)は非能格動詞の例で、*fret, laugh, play* という同じ動詞が、(28a)と(28b)とで使われていて、PP (*into the room*) は、[bounded]という素性を持つのに、(28a)と(28b)との容認性の違いがどうして生じるのかが説明できない。

- (28) a. Penny fretted/laughed/ played himself into
the room.
b *Penny fretted/laughed/ played into the room.
(Rappaport Hovav and Levin 2001: 773)

以上の経験的な事実から、[bounded]という素性には問題がある。またこの素性には概念的にも問題がある。つまり、いつどのような時に、[bounded]という素性を持つのか、何も説明されていない。

第二に、Thompson は、(29)では、*quickly* の修飾するターゲットが、動詞であるのか文であるのかによって、二通りの解釈があることを指摘している。

- (29) John built the house quickly.
Manner reading:
John moved fast while he was building the house.
Whole event reading:
The event of building the house took a short
period of time.
(Thompson 2006: 219)

Thompson (2006: 220–221) は、これら二通りの読みを、それぞれ、統語構造から読み取るには、(30)のように、*quickly* が付加される統語位置が異ならなければならないと主張している。

- (30) Whole event reading の場合は *quickly* は AspP に付加されるが、それに対して、Manner reading の場合は *quickly* は VP 又は vP に付加される。

しかしながら、Rappaport Hovav and Levin (2001) は、(31)と(32)の例をあげて、*quickly* が生起している統語構造上の位置は同じなので、(32)の強い結果構文の場合も、(31)と同様に、二通りの解釈が可能であることが(30)から予測

されるが、予測に反して、*manner reading* の読みがないことを指摘している。この事実を(30)では説明できない。

(31) Trace quickly ran to the library.

Manner reading: Tracy ran quickly.

Whole event reading:

Tracy got to the library quickly.

(Rappaport Hovav and Levin 2001: 776)

(32) Peter quickly read himself into an inferiority

complex, after a few slow deliberate readings

of his classmates' theses.

*Manner reading: Peter read quickly.

Whole event reading:

Peter quickly developed an inferiority complex.

(ibid.)

3. 提案

前節は、大きな単位の意味はそれを構成する下位単位の意味の組み合わせから決まるとする意味の合成性に基づいた意味論をとる投射主義アプローチでの結果構文の分析には問題点があることを見てきた。これに対し、Goldberg (1995)、影山 (2001)、Goldberg and Jackendoff (2004) などが提案する構文主義アプローチの観点からは、構文を基本的な単位の一つとして認め、それぞれの構文にはそこに生起する動詞の意味に帰することができない特有の意味(構文の意味)があると主張されている。特に、Jackendoff (1997) においては、音韻・統語・意味のすべてに生成能力を認め、互いが「対応規則」(correspondence rule)によって関連づけられる3部門並列モデルが提案されている。そこで、この文法モデルを基礎にして、この章では、結果構文の意味は、その構文に現れる動詞の意味から解釈できない結果構文特有の意味の存在を認める可能性があることを主張する。さらに、「直接目的語制約」は統語構造に課せられる制約ではなくて、概念構造に課せられる制約であることを示す。

3・1 構文主義アプローチによる

「直接目的語制約」の捉え直し

2.2 節で述べた非対格性の仮説からの「直接目的語制約」は、影山 (1996: 212) が指摘するように、能格動詞あるいは非対格動詞の主語が D 構造において目的語位置にあることを示すだけで、なぜ直接目的語だけが、結果述語の対象になるのかという根本的な説明を与えているわけではない。そこで、本稿は、統語構造と概念構造は互いに独立した部門であるという3部門並列モデルを基礎として、

「直接目的語制約」は統語構造に課せられる制約ではなくて、概念構造に課せられる制約であることを示す。それによって、直接目的語だけが結果述語の対象になるのかという問題に説明を与える。

3・1・1 概念構造の BECOME 関数の外項を

結果述語が叙述する

2.2 節で指摘した第一の問題点であげた、移動様態動詞(16)と内在的に方向付けられた移動動詞(34)と結果述語との共起の文法性の対比について考えてみよう。

(33) John ran into the room. (= (16))

(34) *John arrived breathless. (cf. (1d))

(Tortora 1998: 339)

Rappaport and Levin (1998: 100–103) は、(33)の動詞を、移動の様態を表わす様態動詞 (manner verbs) (*run*, *skip*, *jog* など) とし、一方、(34)の移動動詞を、着点を内在的意味する結果動詞 (result verbs) と分類した。前者を *run* 型動詞と呼び、後者を *arrive* 型動詞と呼ぶ。さて、行為と結果を表わすためには、行為連鎖の観点からは、(35)のように、3つの事態が時間の流れに沿ってつながっていると考えられる (Langacker 1987; Croft 1991)。

(35) 行為連鎖 (action chain) :

<活動>→<変化>→<状態>

<変化>には、場所変化と状態変化を区別する必要がある。(36)の移動動詞は着点を内在的意味とする結果動詞で、(36a)と(36b)の対比が示すように、場所変化は表わすが状態変化は表わさない。それに対して、移動様態動詞は、(37a)では、場所変化を、(37b)では、状態変化を表わすことができる。

(36) a. We arrived at the station.

b. *We arrived breathless.

(Levin and Rappaport 1995: 58)

(37) a. John walked into the room.

b. John walked himself into a coma.

(Goldberg and Jackendoff 2004: 549)

なお、Rappaport and Levin (1998: 100-103) は、移動動詞の分類と同様の観点から、状態変化動詞についても分類した。*run* 型動詞に対応する様態動詞として、*sweep*, *wipe* などの働きかけの様態を表わす動詞 (以後、*wipe* 型動詞と呼ぶ) と、*arrive* 型動詞に対応する結果動詞として、

open, *break* などの結果を表わす動詞（以後、*break* 型動詞と呼ぶ）に分類している。結果動詞としての *break* 型動詞にも、*arrive* 型動詞と平行した不適格な例が指摘されている。

(38) *The vase broke worthless.

(Jackendoff 1990: 240)

この非文法性を、Jackendoff (1990) は、*break* が点的出来事 (point-event) を表わすというアスペクトの性質から説明した。しかしながら、影山 (1996) は、*break* が結果述語を取る次の例を挙げて、問題のありかはアスペクトではなくて、結果状態の有様そのものであると主張した。*break* は対象物が元の一体性を失った状態を意味するから、次例のように *to pieces* などは、その状態をさらに詳しく描写している。

(39) as if a dish or kettle had been broken to pieces.

(Alice's Adventures) (影山 1996: 219)

Tortora (1998: 342) も、次の例を挙げて、同様の指摘をしている。

(40) a. The wedding cake melted into a slimy mess.

b. *The wedding cake melted ugly.

(Tortora 1998: 342)

into a slimy mess は、ケーキが解けた状態を、さらに詳しく描写しているが、*ugly* は、状態変化を特定化するものではなく、対象物に付随する価値判断を述べている。

移動動詞の場合も同様の説明ができる。(36a)の *at the station* は、場所変化を特定化するが、(36b)の *breathless* は状態変化を表わし、場所変化を特定化しないので不適格であると主張している。以上の意味制約を、Tortora (1998: 341) は次のように記述した。

(41) The Further Specification Constraint :

A verb that is inherently delimited may occur with a resultative, so long as the resultative acts as a Further Specification Constraint

(Tortora 1998: 341)

また、状態変化と場所変化には、各々別の次元に属する抽象的経路と物理的経路が関わっている。そこで Goldberg (1995: 82) は、(42)をあげて、(43)の不適格性を説明した。

(42) Unique Path (UP) Constraint :

If an argument X refers to a physical object, then no more than one distinct path can be predicated of X within a single clause.

(Goldberg 1995: 82)

(43) *Ann kicked her black and blue down the stairs.

(Goldberg 1991: 369)

以上の考察から、(36b)と(38)の非文法性は、D 構造の直接目的語位置に具現する項を結果述語が叙述していないからではなく、結果構文が意味する「行為 (上位イベント) + 変化・状態 (下位イベント)」の結果・状態を示す概念構造 (cf. Jackendoff の概念意味論) において、結果述語が、BECOME 関数の外項を、(41)や(42)などの制限に抵触し、叙述できないからと説明できる。このように考えると、「直接目的語制約」とは統語構造に課せられる制約ではなくて、概念構造の CAUSE 関数の内項 (BECOME 関数の外項) を結果述語が意味制約に応じて叙述するという制約として構文主義アプローチの下では捉え直すことができる。

(44) 内項の制約 :

結果述語が叙述できるのは、概念構造において CAUSE 関数の内項 (BECOME 関数の外項) に限られる。

3・1・2 結果述語が叙述するのは、

概念構造の CAUSE 関数の内項である

まず、結果構文で現れる動詞に後続する名詞句 (postverbal NP) を考察してみよう。Carrier and Randall (1992) は、postverbal NP に中間態形成 (middle formation)、形容詞的受身 (adjective passive)、名詞化 (nominalization) という内項 (動詞が意味選択する項) を適用のターゲットとする統語規則が、他動詞結果構文では適用可能で、自動詞結果構文では適用不可能であることを示している。

(45) 他動詞結果構文 : He hammered the metal flat.

a. 中間態形成 : This metal hammers flat easily.

b. 形容詞的受身 : the hammered-flat metal

c. 名詞化 : the hammering of the metal flat

(Goldberg 1995: 182)

(46) 自動詞結果構文 : He drove his tires bald.

a. 中間態形成 : *Those tires drive bald easily.

b. 形容詞的受身 : *the driven-bald tires

c. 名詞化 : *the driving of the tires bald (ibid.)

彼らは、この違いを、(47)に示した語彙における θ 格子の指定の違いを通して、項構造の違いとして説明する。

- (47) a. hammer agent [theme r-state]
 b. drive agent [r-state]

(47)を仮定すると、投射主義アプローチの立場の基盤をなす θ 基準を見直さなければならないという問題が生じる。また、中村 (2003) は、結果構文の生起可能性をすべて語彙項目ごとに指定できるとすれば、結果構文に生起可能な動詞と不可能な動詞の区別を原理的に区別できず、この構文の持つ生産性について説明できないという問題点を指摘している。しかしながら、Carrier and Randall (1992) があげた例は、他動詞結果構文の場合、主動詞が postverbal NP に意味役割 (θ 役割) を与えるが、自動詞結果構文の場合 postverbal NP に意味役割を与えないという重要な点を指摘していることを気に留める必要がある。

そこで、本稿では、他動詞結果構文であろうと、自動詞結果構文であろうと、結果構文で現れる postverbal NP には、構文事象にかかわる構文的意味が、構文から与えられていることを主張したい。そこで、前でみた *wipe* という興味深い動詞に、もう一度目を向けてみよう。*wipe* は、本来状態変化を表す動詞ではないので、結果状態を内包していないことが(48)からわかる。

- (48) She wiped the table clean but it was still dry.
 (Goldberg and Jackendoff 2004: 550)

さらに、このことは、影山 (1996) が指摘する(49)の容認性の違いから確かめられる。つまり、中間態構文は働きかけ (ACT ON) だけの意味を持つ接触・打撃動詞には適用しないと仮定すると、(49a)のように、*wipe* は、働きかけの意味を示しているので中間態構文としては、不適格であるが、(49b)のように、*wipe* が結果構文に生起すると文法的になるという事実からも示される。

- (49) a. *This table wipes easily.
 b. *This wall kicks/pounds easily.
 c. This table wipes clean easily.

以上から、*wipe* が *She wiped the table clean.* のように、結果構文で生起すると、「ふく」という動作によって対象がきれいになるという状態変化を表すことになる。そこで、Goldberg and Jackendoff (2004) は、本来 *wipe* という動詞の目的語は被影響性を受けないが、結果構文で生起する

と、目的語は、「ふく」ことによってきれいになるという被影響性を受けることになり、被動者 (patient) であると主張している。この見解を正しいとするならば、被動者は、本来の動詞 (結果構文で用いられていない場合) が、内項に与える θ 解釈に関わる主題役割ではなくて、Jackendoff (1990) が提案する、行為層 (action tier) に属する意味役割である可能性がある。この可能性を探るためには、結果構文で生起する主動詞に後続する目的語は、この構文から離れて、動詞が本来取る目的語とは異なることを示す必要がある。

まず、強い自動詞結果構文で現れる「見せかけの再帰代名詞」は、語彙主義アプローチの下では、直接目的語の制約をみたすための統語的な役割を果たす意味のない語彙項目と考えられているが、(51)のように、被動者としての意味を持つ場合がある。

- (50) a. Bill cried himself to sleep
 (fake reflexive; = (21))
 b. *Bill cried Sue to sleep.
 (51) a. Bill sang himself to sleep.
 (ordinary reflexive; = (22))
 b. Bill sang Sue to sleep.

Goldberg and Jackendoff (2004) では、(50)の動詞 *cry* は、postverbal NP に被影響性の作用をもたらすことはないが、他方、(51)の動詞 *sing* は、例えば、子守唄のようにやさしく歌って、相手を眠たい状態に変えるという意味で、postverbal NP に被影響性の作用をもたらすとされている。従って、(51)の再帰代名詞は、結果構文に特有の被動者という役割を担う再帰代名詞である。しかしながら、(50)の再帰代名詞は、 θ 解釈に関わる主題役割でも、被動者でもないこととなるので、何であるのかは問題が残る。この再帰代名詞は、3.1.1 節の(37b)と同じ働きをしていると考えられる。概念構造に存在しないが、音韻構造と統語構造に存在し、対応規則により、音韻的に具現している音韻的に可視的な再帰代名詞と考えられる (cf. Cullicover and Jackendoff 2005)。

また、興味深いことには、(50b)と(51b)の容認性の違いが示すように、強い自動詞結果構文において「下位範疇化されない NP」の生起が許されるのは、構文事象の被動者という役割を持つことが必要条件であるということである。

それに対して、(50)の *cry* の場合は、(52)の実例が示すように、下線部で示した赤ちゃん (*she*) が、泣き疲れて寝てしまうという意味が示すように、眠ってしまうほど、疲れるまで「泣く」ことは、自分に対してありうるが、相

手に対しては、語用論的にありえない。

- (52) The park-keeper looked at the sleeping form in the buggy. 'She doesn't look very upset now.' 'No. She cried herself to sleep. Poor love.' There was a silence. (N. Hornby, *About a Boy*)

さらに、次の対比を考察してみよう。

- (53) a. I tried to wiggle myself comfortable in the passenger seat.
b. *I tried to wiggle comfortable in the passenger seat.
(Rappaport Hovav and Levin 2001: 778)

心地よい状態に変化したという結果は、動詞 *wiggle* が意味する「小刻みに揺らす」という行為から得られるものではない。その状態変化を表すためには、結果構文に特有な意味を用いて表わす。そこで、移動の意味形成のため、「再帰代名詞」(経路(隣の人との間に隙間)を作るため、継続的に揺らす自分自身)が義務的である。次の例の不適合性も同様の理由である。

- (54) a. *Ted cried to sleep.
b. *She yelled hoarse.
(Goldberg and Jackendoff 2004: 550)

以上の観察から、着点句と共に共起して、結果構文として現れた運動動詞は、後続する名詞句に、被影響の作用をもたらしていると提案する。すると、この節で考察している再帰代名詞は、結果構文に特有な被動者という役割を担う結果構文に特有の再帰代名詞である。一方、前節で見た再帰代名詞は暗黙項である。また「下位範疇化されないNP」の生起が許されるのは、被動者という役割を持つことが必要条件であるということがわかった。

さて、ここで、強い自動詞結果構文と平行的な現象を One's Way 構文で見よう。

- (55) John yelled/shouted/moaned his way down the street. (高見・久野 2002: 363)

この構文の特徴は、動詞が自動詞であるにもかかわらず、その自動詞が、*down the street* のように経路 (path) を表す PP とともに、*his way* という擬似名詞句を取っている点である。この *one's way* を強い自動詞結果構文の「みせかけの再帰代名詞」と同様に、意味がない項目として扱う

分析がある。しかしながら、Maranz (1992) と同様、大室 (2008) が次の例をあげて、*one's way* に意味があることを主張している。

- (56) They made their separate ways to Europe, Pamela going home to England and Gunther to his native Germany.

<brbooks> (大室 2008: 201)

大室は、構文イデオムとしての読み(別々の道を作ったという文字通りの読みはない)にもかかわらず、*separate* という語が前におかれ、*way* ではなく *ways* という複数形の形をとっていることに注目した。ここでは、主語 *they* は *Pamela* と *Gunther* で、この二人が同じヨーロッパに帰っていくのだが、*Pamela* はイングランドへ、*Gunther* はドイツに帰ることから、分かれた方向へ進んでいることが示されている。よって、分離した2本の経路ができあがるから *ways* と複数形になる。ここで重要な点は、 θ 解釈に絡む意味のない *way* が、One's Way 構文特有の何らかの意味を担っているという点である。この洞察は、強い自動詞結果構文で *sing* 動詞が現れた場合に生起する意味のある再帰代名詞と同じ働きをしている可能性があると考えられる。また、大室は、*separate* は形式的には名詞 *ways* を修飾しているが、転移修飾として、主語が進む行為を修飾し、主語が分かれた方向に進むことを意味し文が表している事態 (event) 全体を修飾していると主張する。この主張は、前節で見た(57)の強い結果構文の *quickly* は、whole event reading の読みしかないことを指摘したことと関係があると考えられる。

- (57) Peter quickly read himself into an inferiority complex, after a few slow deliberate readings of his classmates' theses. (= (32))

つまり、強い結果構文では、(56)と同じように、動詞が持つ θ 格子の合成的な計算から作られた意味ではなく、構文主義アプローチのもとで、構文全体から生じる結果構文特有の構文的な意味がある可能性があることを主張したい。

さらに、Levin and Rappaport Hovav (1995) は、強い他動詞結果構文として現れることのできる他動詞は、(58)と(59)のように、非特定目的語削除 (unspecified object deletion) を許す *eat* と *drink* のような動詞であると指摘している。

- (58) a. They drank the teapot dry.
 b. *They drank the teapot.
 (Rappaport Hovav and Levin 2001: 776)
- (59) a. Mary ate an apple {in/*for} an hour.
 b. Mary ate {*in/for} an hour. (ibid.)

「下位範疇化していない目的語」*the teapot* は、(60)のように、事象計測 (measuring-out) が可能な項アスペクト限定詞として機能していると考えられる。

- (60) eat [(MEASURE)] (Tenny 1994: 107)

この例は、Omuro (2003) が、One's Way 構文の *way* はアスペクト限定詞としての働きを持つとするのと同じように、擬似目的語を分析できる可能性がある。

さらに重要なことは、結果構文で現れる postverbal NP は、(61b)が示すように、run という動詞の意味から推論できる事態 (John が道路の上を走る) などから、語用論的に (世界に関する知識から) 結果構文の目的語として選ばれていることがわかる。つまり(61b)の下線部で表されていた *the pavement* が、(61a)で、強い結果構文がもつ意味役割の被動者として、目的語位置に生起している (Jackendoff 1990)。

- (61) a. John ran the pavement thin.
 b. John ran on the pavement.

次の例も同様である。

- (62) a. They drank the pub dry
 b. They drank in the pub.

以上から、結果構文で現れる postverbal NP は、 θ 解釈に関わる主動詞に意味選択される項ではなくて、語用論的に構文によって選択される、行為層に関わる被動者項であり、アスペクト限定詞として働くと主張する。

4. まとめ

本稿では、結果構文は動詞だけの意味だけでは説明できないことを示し、投射主義アプローチではなく、構文主義アプローチで分析する必要があることを論じた。結果構文が持つ意味は、動詞の意味に帰することができない意味 (構文的意味) であることを主張した。結果構文の制限である「直接目的語制約」は、(44)のように、統語構造に関わるのではなくて概念構造に関わることを主張した。

参考文献

- Borer, H. (1994) 'The Projection of Arguments: Functional Projections'. *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 17: 19–47.
- Carrier, J. and J. H. Randall (1992) 'The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives'. *Linguistic Inquiry* 23: 173–234.
- Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Culicover, P. W. and R. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- 藤田 耕司・松本 マスミ (2005) 『語彙範疇 (I) 動詞』。東京: 研究社。
- Goldberg, A. E. (1991) 'A Semantic Account of Resultatives'. *Linguistic Analysis* 21: 66–96.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. and R. Jackendoff (2004) 'The English Resultative as a Family of Constructions'. *Language* 80: 532–568.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997a) *The Architecture of the Language Faculty*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997b) 'Twistin' the Night Away'. *Language* 73: 534–559.
- 影山 太郎 (1996) 『動詞意味論: 言語と認知の接点』。東京: くろしお出版。
- 影山 太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』。東京: 大修館書店。
- 岸本 秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』。東京: くろしお出版。
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, B. and T. Rappaport (1988) 'Lexical Subordination'. *Papers from the 24th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, 275–289.

- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1991) 'Wiping the Slate Clean: A Lexical Semantic Exploration'. *Cognition* 41: 123–151.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth and M. Rappaport Hovav (2005) *Argument realization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1998) 'Building Verb Meanings'. In M. Butt & W. Geuder (Eds.), *The projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors* (pp. 97–134). Stanford, CA: CSLI Publications.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (2001) 'An Event Structure Account of English Resultatives'. *Language* 77: 766–797.
- Marantz, A. P. (1992) 'The Way-Construction and the Semantics of Direct Arguments in English: A Reply to Jackendoff'. In T. Stowell & E. Wehrli (Eds.), *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon* (pp. 179–188). New York: Academic Press.
- 丸田 忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー：語彙的使役動詞の語彙概念構造』。東京：松柏社。
- 三原 健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』。東京：松柏社。
- 中村 捷 (2003) 『意味論：動的意味論』。東京：開拓社。
- Omuro, T. (2003) 'A Dynamic Approach to the One's Way-Construction in English: From Simple Composition to Phrasal 'Lexical' Idioms to Constructional Idioms. In S. Chiba et al. (Eds.), *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita* (pp. 558–603). Tokyo: Kaitakusha.
- 大室 剛志 (2008) 「構文の変種」。『日本英文学会第 80 回大会 Proceedings』, 200–202.
- 小野 尚之 (2005) 『生成語彙意味論』。東京：くろしお出版。
- Randall, J. H. (1983) 'A lexical approach to causatives'. *Journal of Linguistic Research* 2: 77–105.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (2001) 'An Event Structure Account of English Resultatives'. *Language* 77: 766–797.
- Ritter, E. and S. T. Rosen (1998) 'Delimiting Events in Syntax'. In M. Butt & W. Geuder (Eds.), *The Projection of Arguments: Lexical and Syntactic Constraints* (pp. 135–164). Stanford, CA: CSLI Publications.
- Rivière, C. (1982) 'Objectionable Objects'. *Linguistic Inquiry* 13: 685–689.
- Simpson, J. (1983) "Resultatives". In L. Levin, M. Rappaport, & A. Zaenen (Eds.), *Papers in Lexical-Functional Grammar* (pp. 143–157). Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- 高見 健一・久野 暉 (2002) 『日英語の自動詞構文：生成文法分析の批判と機能的解析』。東京：研究社。
- Tenny, C. L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic.
- Thompson, E. (2006) 'The Structure of Bounded Events'. *Linguistic Inquiry* 37: 211–228.
- Tortora, C. M. (1998) 'Verbs of Inherently Directed Motion are Compatible with Resultative Phrases'. *Linguistic Inquiry* 29: 338–345.
- Van Valin, R., Jr. (1990) 'Semantic Parameters of Split Intransitivity'. *Language* 66: 221–260.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Washio, R. (1997) 'Resultatives, Compositionality and Language Variation'. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1–49.
- Wechsler, S. (1997) 'Resultative Predicates and Control'. *Texas Linguistic Forum* 38: *Proceedings of the 1997 Texas Linguistic Society Conference*, 307–321.

(受理 平成 23 年 3 月 19 日)